

比喩は“経済的”で“合理的”だから存在する

Lakoff と Johnson の概念比喩理論への更なる異論

The Basis for (Conceptual) Metaphor is Rather “Rational” (Than Conceptual) Arguments against Lakoff and Johnson’s Anti-objectivist, Ultra-conceptualist Characterization of Metaphor

黒田 航

(独) 情報通信研究機構 けいはんな情報通信融合研究センター

Kow KURODA

National Institute of Information and Communications Technology (NICT), Japan

概要

This paper provides arguments against Lakoff and Johnson’s (1980, 1999) Conceptual Metaphor Theory (CMT) to invalidate their *gratuitously conceptualist* claims about nature of metaphor, which is based on their failure to recognize two distinct “roles,” or rather “effects,” in uses of metaphor, linguistic or conceptual. By this, I’m going to suggest that CMT account of metaphor is partial at best.

The required two roles of metaphor are: (i) METAPHOR (NEEDED FOR HEARER’S) BETTER UNDERSTANDING (MBU) and (ii) METAPHOR (NEEDED FOR SPEAKER’S) EASIER PRODUCTION (MEP). CMT could account for MBU, but not for MEP, because the conceptual basis/necessity of metaphor that CMT claims for is valid for the problem on hearer/understander’s side only: there is no observable necessity for speakers to rely on metaphor, either in terms of language they use or of conceptualization pattern they appeal to; for speakers, metaphor is *just* one of their options available to them.

With the distinction between MBU and MEP, we have a different story for the *pervasiveness of metaphorical wording/language*, which is correctly observed by Lakoff and Johnson’s work: for speakers, metaphor is “cheep,” because they need not painfully learn how to use different wordings for different knowledge domains; this is endorsed by the Principle of Least Effort. MEP is on this basis, but MBU is not. For hearers, use of metaphor is “effective,” even if costly, because it provides a broader, and sometimes a better range of new understandings. MBU is on this basis. Actually, this effect is adequately captured in CMT, but MEP is not on this basis. The basis of metaphor, thus, is more adequately understood as “economical” and even “rational”, in the sense that speaker’s and hearer’s different interests are “comprised” and “moderated” in a natural and reasonable way.

But, Why do some kinds of metaphor sometimes “feel unavoidable”? The most promising answer is this: people, especially as speakers, are more or less “addicted” to metaphor. But this can be explained as *a matter of habituation, not a matter of necessity*; difficulty to avoid metaphorical expressions does not necessarily mean that metaphor is *necessitated*. The real situation is rather that people are so habituated to metaphorical language, and find difficulty in not appealing it any more than heavy smokers can speak without cigarettes. This is rather a direct consequence of the “binding” of thought to language advocated by Vygotsky (1962). This interpretation of the “some patterns of metaphor feel unavoidable” problem would account for conventionalization of metaphorical thinking mediated by metaphorical language in a natural manner. Also, my arguments would fortify Murphy’s (1996, 1997) claims against CMT advocated and defended by Gibbs (1996).

1 はじめに

この論文は [18, 19] の内容を補完し, [6, 7, 8, 9] の概念比喩理論 (Conceptual Metaphor Theory: CMT) の問題点を指摘し, 解決法を示唆する。

基本的な主張は以下の通りである: 比喩の存在の基盤は, 話者と聴者のあいだの利害の一致という, 基本的に経済性の原理 (economic principles) に拠るもので, その意味で比喩の存在意義は“合理的”なものである。これが正しければ, CMT で説かれるような「比喩に基盤は本質的に概念的である」という説は必ずしも支持されない。比喩に概念的基盤があるのは—特に聴者にとっては—ありそうなことだが, それが比喩の本質的であるかは, 観察可能なデータからは明らかではない。実際, 話者は聴者とは異なる動機—「領域ごとに同じ表現を使い, 領域に固有の言葉遣いをなして済ませよう」という同一効果の下での労力の最小化の原理—によって比喩を使用している可能性がある。この可能性を考える限り, 比喩の第一の, そして究極の存在理由を, 比喩が概念化のパターン, あるいは“思考様式”を決定するものであるとする CMT 流の説明は, 控え目に言っても短絡的で, かつ一面的である。

2 比喩の二つの相: 発話者にとっての比喩 ≠ 理解者にとっての比喩

[8] は以下のように比喩は抽象的な概念の理解のために必要であると説く:

- (1) Because so many of the concepts that are important to us are either abstract or not clearly delineated in our experience [...], **we need to get a grasp on them** by means of other concepts we understand in clearer terms. [8, p. 115]

一つハッキリさせておくべきことがある: to get a grasp on [important abstract concepts] という必要性が生じるのは誰にとってか? つまり, ここで彼らが言っている“we”とは誰のことなのか?¹⁾

2.1 誰にとっての必要性?

可能性は三つある: (i) 表現者 (発話者) としての“we”; (ii) 理解者 (聞き手あるいは読み手) としての

“we”; (iii) 両者の違いを超越した (つまり無視した) 抽象的言語使用者としての“we”。

これらの違いは本質的である。認知的課題と見なした場合, 産出課題 (比喩的言語表現 X を話者が処理する課題) と理解課題 (X を聴者が処理する課題) は明らかに違う二つの課題である。

これらの区別に関して, [8] を含めて言語学者は大雑把であり, 三つの可能性の違いが何であるか, そもそも自覚していない場合が多い。仮にその違いを自覚しており, それに関して何か言えたとしても, 要領を得ないことが多い。だが, この違いに関して心理学者はなるべく厳密であろうとする。この辺にも, 心理学と言語学での比喩研究の内容の食い違いの理由が存在する。

2.2 立場の違いの比喩の説明への影響

まず, (iii) は論外である。もし彼らがこの種の抽象的な主体を意図しているのであれば, どうやって超越的な存在に必要性を定義することができるのだろうか? これは明らかに彼らが目指している経験主義的実在論の立場と矛盾する。これが合致するのは, 言語使用の側面を捨象した生成言語学の立場 [2] のみだろう。これが妥当するとは, どうてい考えられない。

では, (ii) だろうか? これは十分ありそうな可能性である。良い比喩はおそらく聞き手の理解を促進するし, 場合によっては, 比喩は—もはやよし悪しに関係なく—理解を見こめる唯一の可能性である。このような理解促進効果が見込まれているからこそ比喩が使われると考えるのは, まったく妥当である。L&J の説明は (ii) の場合に, 非常にうまくいっている。

ところで, (i) に関してはどうだろうか? (ii) に関してうまくいったから, もう (i) は関係がないというわけではない。(i) にも比喩は (ii) とは別の仕方である。

例えば, 恋愛 (関係) について語ろうとしたとき—正確には恋愛 (関係) で生じる様々なデキゴトについて (なぜなら私たちが *We're spinning our wheels* などと言っているとき, 話題が上がっているのは恋愛 (関係) そのものではなく, “何かがうまく行かないこと”, つまり〈ある種の問題に直面している〉ことだからである。恋愛 (関係) そのものについて語

¹⁾ この疑問を私に提起したのは, 中本敬子 (京都大学教育学研究科) である。私はそれまでこの点には思い至らなかった。鋭い疑問に感謝する。

るとなれば、今度は *Love is gold* のように、存在状態の比喩 (ontological metaphor) を使う必要がある)

— 比喩的表現しか存在しないということはあるし、実際に起こっているように見える。

だが、問題は残る: このとき生じている必要性は、本当に L&J が言うような “need to get a grasp on abstract and undelineated concepts” のようなものなのだろうか?

実は、そうではない。

2.3 発話者にとっての比喩の価値の説明

比喩表現の産出を厳密に表現主体が直面している課題だと考えた場合、それが L&J の説くように “ある種の理解困難な概念を理解可能なものにする必要性による” と考えることは必然的ではなく、(少なくとも同じくらいありそうな) 別の解釈がある。それは発話者にとっての比喩表現使用の動機づけの説明として、次のように説明することである:

- (2) 発話者は比喩を使うのも使わないのも自由なのだが、比喩を使うと (それを使わないより) 楽ができる。

(2) が話者が比喩を使う理由であると考えるのは理に合っていると私は考えるが、これは CMT の図式にはうまく当てはまらない。なら、誤りか? そうではないだろう— というのが私の主張である。

2.3.1 話者はなぜ比喩表現を使うか?

この説明で仮定されているのは、非常にあたり前のヒトの性質: “ヒトは (他の条件が同じならば) やりにくいことより、やりやすいことをする” である。

発話者にとって比喩の使用が “楽だ” というのは、相手が発話状況から発話内容と発話意図を正しく推測できるという条件の下では、

- (3) a. 発話内容が発話状況から明らかであれば、領域固有の表現を使わなくて済む
b. 従って、覚えておかなければならない語彙、構文の絶対量が減る
c. これによって、実際の発話の際に使用する語彙、構文の検索にかかる時間、処理労力も削減できる

のような数々の “恩恵” があるからである。

2.3.2 *How far we've come* の場合

具体例を挙げるなら、例えば、

U: Look how far we've come

で、これが愛の領域が先領域だと “わかる” のは、なぜなのだろうか?

それは第一に、ヒトが言語表現によって明示的に与えられていない発話状況を想定できるからである。だが、実は、この発話では先領域の領域が先領域であるという情報は、語彙的にはコードされていない。それは発話状況から検知されるか、聞き手/読み手が状況を共有しないならば、想像によって再構築されなければならない。

同一の発話 *U* を苦勞を共にしたビジネスパートナーに言うこともできる。この場合の先領域領域は 〈恋愛〉 関係ではなく、〈共同事業〉 である。この場合も、そうであることは語彙的にはコードされていない。それは状況から検知検知されるか、聞き手/読み手が状況を共有しないならば、想像によって再構築されなければならない。

もちろん、共同事業を恋愛関係に喩えることも可能だし、また、その逆も可能だが、そのことはここでは問題にしない²⁾。

2.3.3 話者にとって “楽ができる” 状況

重要なのは—比喩写像が存在するにせよ、しないにせよ— (*be*) *spinning one's wheels, how far we've come* のような表現類が、広領域適用可能性 (broad applicability) をもっているという点である。この種の表現は事実上 *T* を選ばず、ある種の領域からの独立性 (domain independence) を獲得していると言うことができるだろう。

このように適用範囲の広い表現が自在に使用できる状況というのは明らかに、話者にとっては非常に楽ができる状況である。従って、意味が確実に伝わるという前提条件が整えば— 特に理由がない限り— 話者は領域に依存しない表現を使うだろう³⁾。これは比喩が非比喩を駆逐するという効果につな

²⁾ とはいえ、M1: LOVE (RELATIONSHIP) IS A BUSINESS PARTNERSHIP と M2: BUSINESS PARTNERSHIP IS A LOVE RELATIONSHIP のどちらも可能だということは、MMT にとっては問題である。M1, M2 は逆写像の関係にあり、MMT の帰結の一つである、写像の非対称性の主張に反するからである: 従って、(i) これらはいずれも比喩ではないとするか、(ii) *S, T* の非対称性の成立条件を見直すか、のいずれかの対処法が必要とされるだろう。

³⁾ この点は、遠隔指示による共同バズル解決課題のような状況で、[23] が報告している相手に慣れるに従って比喩の使用が増えるという事実によっても支持される。

がる。

ただ、幸いなことに、比喩は悪貨ではない。

2.3.4 MBU と MEP

さて、説明を明瞭にするために、少し用語を整理する。

まず、L&J が説く比喩の説明仮説を、その特徴から (聞き手の) より良い理解のためのメタファーの仮説 (Metaphor (Necessary/Needed) for Better Understanding Hypothesis; MBU 仮説) と呼ぶことにする。理由は自明であろう。

これに対比して、(2) に示した説明の可能性を (話し手が) 楽をするためのメタファーの仮説 (Metaphor (Necessary/Needed) for Easier Production Hypothesis; MEP 仮説) と呼ぼう⁴⁾。

MBU と MEP はいずれも “ある種の (認知的) 必然性” から来るものである点では同じだが、必然性の発生する理由、ないしは “基盤” が異なっている。

重要なのは、MBU, MEP 仮説は互いに排他的ではないという点である。つまり、これらは比喩の説明の際に同時に用いられてもよいし、また、うまく使い分けることで、一方のみに訴えるより効果的な説明を提供する可能性がある。私は実際それが比喩の説明にあてはまることを以下で示そうと思う。

2.4 MBU と MEP は両立し、なおかつ、比喩の別の側面を説明する

MBU, MEP の二つを排他的なものだと見なさず、それらを組み合わせることが可能である。それは以下のように、MBU と MEP が説明している側面が異なるからである。

- (4) a. MBU は聞き手にとっての比喩表現の利用価値を説明する
- b. MEP は話し手にとっての比喩表現の利用価値を説明する

MBU が説明するのは、L&J が言うような (聞き手の) 理解の促進である。これに対し、MEP が説明

するのは、話し手の比喩使用の動機である。

次の点には注意が必要である:

- (5) 比喩の使用によって話し手自身の “話すべき内容” の理解が増すとは考えられない。

そういう “自己啓蒙” めいた効果が偶発的に伴うということは考えられるが、それが目的となることは控え目に言っても、不自然である。比喩を用いるのであれ、非比喩を用いるのであれ、発話は自分以外の他者への伝達が見こまれて行われる活動であり、他者への意図の伝達が主効果である。ここに比喩の使用が自己啓蒙であるという特徴を強いることは、発話効果の主従の関係を反転させることになり、理不尽としか言いようがない。だが、L&J が言っていることを真に受けると、この理不尽なことが強要される。

2.4.1 誰が、いつ利益に預かっているのか

以上の考察から以下のような重要な帰結を得る:

- (1) a. 比喩使用によって “より良い理解を得る” という利益を得ているのは、聞き手であって話し手ではない
- b. 比喩使用に “楽をする” という利益を得ているのは、話し手であって聞き手ではない

発話者の労力と理解者の労力の間には、需要と供給の関係に似た拮抗がある。

ここで重要な点を繰り返す: すでに述べたように、話し手が比喩の使用によって “より良い理解” を達成するという保証はないし、また、そうなっている証拠もない。そればかりか、そもそも、そう考える理由すらない。

これは L&J の比喩の説明で “行きすぎた部分” を反証する。L&J の理論の最大の問題点は、次を主張する点にある:

- (6) 比喩は、聞き手にとっても話し手にとっても、より良い — 時には “唯一可能” な — 理解を実現するためのものである。

“比喩が聞き手にとって、より良い — 時には “唯一可能” な — 理解を実現するためのものである” ということはありうる。これは (1) の読みとして妥当である。

⁴⁾ これは関連性理論 (Relevance Theory: RT) [1, 15] の枠組みで大雑把な語り (loose talk) と見なすことで比喩を特徴づけようとする試みと類似している。ただし、現時点での RT の説明は、「聞き手が雑言な発話にどう対処するか」が問題となっており、発話者が雑言をすることに積極的な意味があるという説明には私が提唱する「利害の一致に基づくモデル」には至っていないように思われる。

だが、“比喩が話し手にとって、より良い—時には“唯一可能”な—理解を実現するためのものである”という主張が伴っているとすれば、それはそもそもナンセンスであり、これを支持する経験的データはまったく存在しない。従って、これは(1)の読みとしては、まったく妥当でない。

2.4.2 比喩の存在の合理性

これに対し、MEPとMBUを組み合わせた説明が正しければ、重要なのは次の点である:

(7) 比喩の利用に関して、話し手と聞き手は、おのおのの“利害”が一致している

話者にとって比喩は、使えば使うほど“楽のできる”すばらしい手段だし、話者にとって比喩は、新しい—場合によっては唯一の—理解を提供してくれるすばらしい手段である。理解できる限りで、比喩は使えば使うほど、お互いにとって利益があがる選択肢である。

従って、(7)が意味することは、次のことである:

(8) コミュニケーションという状況では、比喩(の使用)は合理的な行動である。

これはヒトの言語使用で比喩が広範に存在する説明する仮説で、私がL&JのCMTの対案として提唱する仮説である。

2.4.3 比喩の必然性はヒトの認知の経済性による

多層/複層意味フレーム分析(MSFA) [21, 20, 22, 17]は、ヒトが理解するモノゴト—それらは概念と呼ばれる—の圧倒的多数には名称がないということを示唆している。

これは意外でも何でもない。ヒトの認識能力は非常に高度であり、その結果、ヒトの概念集合は膨大である。概念の一つ一つに独自の名称が存在しなければならぬとしたら、あまりに不経済である。すなわち、概念に対し、圧倒的に名称が不足しているのである。

比喩の使用は経済的な仕方であり、この不均衡を解消する。聞き手がうまく区別できるという前提の下では、同じ名称、あるいは述語を使うことは、何の支障も来さない。つまり、比喩、並びに、いわゆる非字義的意味をもつ発話は、全般的に聞き手の非常に高度な解釈能力—特に文脈選別能力—の見込みの上に成立している。

だが、これはヒトの知性の性質を考えると、別に驚くほどのことでもない。

2.4.4 比喩写像は“翻訳”の一種?

§付録Aの(20)のような例を見る限り、比喩写像では「源泉領域の構造が先領域領域との整合性を保って保存される」というより、「先領域領域の構造が源泉領域の構造に“翻訳”される」と考える方がずっと理に適っているように思われる。複雑性、精密性、自動性、自律性のような特徴は、“会社は(時計のように)複雑で精密な機械である”という概念比喩写像によって作り出されたものではなくて、ヒトが比喩の介在なしに社会や大きな会社の特徴として、おそらく制御不能性で「思いのままにならない」という「負」のアフォーダンスとして認識する特徴であるのだろう。

2.4.5 L&Jの誤り: 特種例はあくまで特種例である

比喩の存在がすでに見てきたような意味で合理的なものだとすれば、L&Jの“比喩が存在するのは、抽象概念の理解を可能にする必要による”という主張は誤りであり、むしろ次のことが意味される:

(9) ある概念体系における比喩の存在は、概念構造を豊かにするとは限らない。

というのは、比喩の効果を“ T に抽象的だが固有の概念構造があり、それに対して S が新しい理解の可能性を与える”と捉え直すと、この際の S の役割は、 T の新しい解釈モデル M の“貸し手”、 T の役割は M の“借り手”、 M は“借り物”の三項関係を形成する。これは比喩的理解が“借り物”であることを強調する比喩理解の理論である。その土台となっている性質は、基本的にGentner [3]やHolyoakとThagard [5]がモデル化している類推(analogy)の基本的性質であり、特別に概念比喩(conceptual metaphor)のようなバロック的命名の必要はない。

これが意味することの一つは、L&J流の概念比喩の理論は、「特種例によって一般例を説明する」という、(人文系の研究にありがちな)誤謬を犯していることである。

従って、MMTの支持者が「比喩が概念構造を豊かにする」と主張するのであれば、それは非循環的な手段を用いて実証されなければならない。だが、非循環的な方法でそれをなすのは単純に言って不可

能であるように思われる。以下にその根拠を示す。

2.5 “ T の構造的性が S からの写像にのみ生じる” という L&J 説の実証的反証のシナリオ

2.5.1 S の多様性/ T の複雑性の相関

“ T の構造的性が T の固有の性質によってではなく、 S による写像のみによって生じる” という L&J 説の実証的反証には、まず次の事実を利用する:

(10) [[T IS S]] (e.g., [[LOVE IS A JOURNEY]]) で T によって受け付ける S の変異の幅がちがう

例えば、 $T = \langle \text{love} \rangle$ のとき、 $S = \{ \langle \text{journey} \rangle, \langle \text{madness} \rangle, \langle \text{sickness} \rangle, \dots \}$ であるが、 $T = \langle \text{jealousy} \rangle$ のときには (なぜか)、 S の可能性はぐっと減る。例えば、[[JEALOUSY IS A JOURNEY]] はかなり奇妙である。これはいかにして説明すべきか?

さて、(10) を説明する仮説として、次のようなものが考えられる:

(11) S の多様性/ T の複雑性相関仮説:

S の変異の幅は概念 T の概念的複雑性と相関する

注意: 概念的複雑性は概念的抽象性とはちがう。複雑性と抽象性の関係がどのようなものかは知られていない。重さ、大きさ、広さ、高さ、のような概念は抽象的だが、それらが特に豊かで複雑な構造をもつわけではない。また、家は具体的だが、十分に複雑な構造をもつ。従って、抽象性は複雑性にとって必要でも、十分でもない。

2.5.2 相関の説明: 二態

ところで (11) の説明は二通りある。L&J の比喩写像理論 MMT の説明は、

(12) T の複雑性は S からの比喩写像によって引き起こされる。つまり、概念 T に固有の複雑性は存在せず、複雑性が何を意味するものであれ、それは比喩写像が作り出す派生的構造である

これに対し、“弱い” 概念比喩のみを仮定し、 $\langle T$ IS S \rangle を源領域からの“借り物” と考えると、次のような説明が可能である:

(13) 概念 T の複雑性は T に固有のものであり、比喩写像によって作られたものではない。 T

自身が複雑であり、 T 固有の異なる側面のあれこれが異なる S によって表現されることが S の変異の幅となっている

ここで、(13) を別な喩えで説明すると、 T がホスト、 S がゲストである関係を考えて、 T の許容量が大きいほど、いろいろなゲスト S が T に「受け入れられる」ことになる。これが S の変異の幅の説明となる。 T の許容量の指標は複雑度である。

2.5.3 T の構造的性は偶発的か、 T に固有か

さて、(12)、(13) の説明のどちらが正しいか、が問題である。仮に (12) が正しいとすると、MMT の説明は必然的に、

(14) S の多様性は単なる偶然の結果である

となる。なぜなら、仮に S が一定の仕方で T に結びつくことが事前に予測できるなら、それは T に固有の複雑性が備わっていることにほかならないからである。

これに対し、“借り物” 概念理論では、

(15) S の変異の幅は T の固有の複雑性によって事前に決まっている

と説明する。

以上のことから、(14)、(15) のいずれが正しい予測であるかと確かめれば、(12)、(13) のいずれが正しい説明であるかがわかる。

2.5.4 検証手順: コーパスの利用

これは、次の A か B かのいずれかの方法で (12)、(13) のどちらが正しいかを確かめることができるはずである。

A: T の固有の複雑性 $C(T)$ を S から独立に測定し、異なる T についての S の変異の幅が $C(T)$ から予測できることを示す。

これが示せたら、(14) は間違いであることが帰結できる。だが、 $C(T)$ を計算する方法は自明ではないし、それ自体に MMT 支持者から文句がつくのは必定だろう。

もっと簡単な方法は (B) である。

B1: 異なる言語 L1, L2 (例えば、日本語、英語) について、概念 T ($\langle \text{愛(情)} \rangle$, $\langle \text{LOVE} \rangle$) とそれに対して源泉となる概念 S の対を網羅する。これから、

$$T1 = \{S1, S2, \dots\}, T2 = \{S1, S3, \dots\}, \\ T3 = \{S4, \dots\}, \dots$$

のような T と S との組み合わせを得る。 T を $L1, L2$ ごとにその複雑性の順に並べる (例えば, おのおのの T について, S の数を数える)

B2: $L1$ についての T の複雑性の順位づけ $C(T, L1)$ と $L2$ についての T の複雑性の順位づけ $C(T, L2)$ とに優れた相関が認められるならば, その最良の説明は, T の順位づけが S のゆきあたりばったりの構造化の結果と見なすより, T の S への許容度の反映であると見なすことである。

(B1,2) を言語全体について行うのは現実的に不可能だが, 適当な規模のコーパスで行うことは可能である。例えば, 日英対訳コーパスの日本語部と英語部を二つのコーパスだと見なして, 方法 (B1,2) で分析することは可能である。

2.5.5 結論

私は (13), (15) が正しいとそれなりに強く確信しているが, どれほど上手くゆくかはともかくとして, (B1,2) の方法で (15) の正しさを示し, それによって (14) を反証し, 結果として (12) が誤りであり, L&J の比喩写像の理論が誤りであることを実証的に示すことが可能であることがわかった。これは, 心理実験による反証 [10, 11] を無視し続ける CMT/MMT [4] をコーパスに準拠して反証できるかも知れないということである。

2.6 T の複雑さは何に由来するか?

T の複雑さ, あるいは豊かさ — これを $C(T)$ とする — は, (L&J が説くように) 概念化に由来するものだと考える必要はないのはすでに見た通りだが, それでも問題は残っている: では, $C(T)$ は — S から転移してきたものでないならば — どこから, どうやって生じるのか?

MMT は確かに一面では $C(T)$ の“説明”にはなっている。もちろん, それは「最良」の説明ではなく, 明らかに誤った説明なのであるが。

2.6.1 “開かれた問い”の説明

$C(T)$ の由来の問題は“開かれた問い”だと私は考えるが, まったく説明の道筋がないわけではない。

私はもっとも単純明快な説明を選び, 次のように説明するのがもっとも妥当だと推測する:

(16) T の豊かさ, 複雑さは, 経験そのものに由来する

仮に私の主張である (15) が正しければ, 愛 (情) はそれ自体が — 比喩 (写像) の適用によらず — 十分に複雑な概念であることが結論できる。ことの真偽は判明していないが, 仮に私の主張が正しいとするなら, こういう風に言える: 愛 (情) という概念が複雑なのは, その概念が“記述”している自然現象に本質的な複雑さが備わっているからである。例えば, ヒトの愛情は動物的な下地をもつ, 複雑な行動, 反応のパターンの織物のことである。それを構成する要素には, 例えばホルモンに左右される周期性, 突発性, 持続性などがある。これからすぐにわかるように, 愛 (情) に関係した行動は, 動物が有効な仕方の子孫を残すために発達した, 非常に精緻な行動体系の上に成立している。このようなシステムが単純でありえようか?

L&J はそうだと説く。彼らが説くところによれば, 愛 (情) の概念は比喩によらなければ理解不能である。その理由は, 愛 (情) の概念は抽象的で, 明確な構造をもたないからである。

愛 (情) の概念はともかく, 愛 (情) の実態は実に複雑で, 実に具体的である。この差は歴史としているが, L&J は完全にこのような点を見落としている。つまり, 愛 (情) の概念の素になっている経験, 別の言い方をすれば, 愛 (情) の記述している自然的対象は, 実に複雑で, 実に具体的なのである。この複雑性, 具体性の実体は, 生態心理学 [12] の知見を取り入れて記述も可能なはずだ。

2.6.2 概念化は言語を媒介にしないで成立しうる

Lakoff らが CMT の理論で完全に見落としている (あるいは違いを意図的に無視している) のは, 次の点である:

(17) 何かについて“知る”ことと, それについて“語る”ことは別のことである。

何かを知ること, それについて語れることを前提にしない基本的な能力である。従って, 次の可能性には十分な注意が必要である:

(18) 概念 (化) の基本的性質:

事態の概念化は言語を前提としないし、概念の獲得は言語的体験を前提としない可能性がある。

だが、この点は CMT の定式化では完全に見落とされている。CMT の議論は、この可能性を無視し、概念が言語を媒介にして可能となると不十分な証拠から結論づけており、根本的に経験的妥当性の危うい議論である。だが、その本質的危うさは、CMT を主張する研究者のあいだでまるで自覚されていない。

2.6.3 CMT の原理的な限界

CMT が扱っているデータは言語データのみである。これは CMT の方法論的限界である。比喩が言語データを媒介にしないと現われない現象である以上、言語化に先行する概念化が非言語的に比喩的であるかどうかは、データからは絶対に言えないことである。どんなに言語データを見たところで、それが非言語的な現象だとは結論できない。従って、比喩的概念が非言語的であると結論できる根拠は、Lakoff らの主張とは裏腹に、まったく存在しないのである。

だが、CMT の支持者はそれ以上のことを言おうとする。なぜか?

2.6.4 認知言語学の反客観主義のバイアス

愛(情)の記述している自然的対象が存在するという前提は、少なくとも認知言語学と呼ばれる共同体の内部では、異常なほどの異論を呼ぶ。それは客観主義の発露だと見なされ、強い非難的になる。だが、私に言わせれば、このような合理的な説明を“客観主義的”であるという理由から退けるのは、まったく愚かであり、非理性的ですらある。

客観主義を嫌い、非理性的で非現実的な比喩の理論を作り出すのと、客観主義と講和し、理性的で現実的な比喩のどちらがいいのだろうか? この答えに窮する人間が科学者であるとは、私には信じられない。

2.6.5 比喩の使用は本当に時間的に増加するか?

L&J の理論的予想は「ほかの条件が同じならば、比喩の使用は時代を通じて単調に増加する」となる。だが、これは本当に言えることなのだろうか?

語の意味の歴史変化のコーパスとシソーラスを利用した実証的な研究 [13, 14] の示唆するところで

は、必ずしもそうではない。語、あるいは形態素の意味は変化するが、増えるとは限らない。増えるのは頻度が高い形態素に限る。これは意味の分化であり、むしろ可能性を増すものとしての比喩の役割が強く出ている。

これは L&J の“強い”比喩の説明は部分的に反証されている、ということである。もちろん、これは「ほかの条件が同じならば」という条件が該当しない、と逃げることもできる。事実「比喩が摩滅する理由はわかっていない」ということにすれば、反証を逃れることはできる。

私が提唱した MBU, MEP の組み合わせによる説明は、これとは別の説明を与える: 比喩の使用が増加するのは、 T の経験内容が豊かになったとき、そのときのみである。実際、これは技術の進歩の結果として、ヒトの日常生活が複雑化すると共に、複雑化した側面に関してのみ新しい比喩が登場し、かつ無用になった古い比喩が忘れられてゆくという事実の、もっとも単純明快な説明であるように思われる。つまり、比喩の使用域の推移は、高度に選択的である。L&J の説明がこの現象に対して、MBU, MEP の組みあわせの理論以上の説明力をもっていないのは、MMT の支持者以外の誰の目にも明らかである。

2.7 比喩の慣習化の効果の説明

次の二つは別のことである:

- (19) a. 聞き手 h が、ある (抽象的) 概念 T を (具体的概念 S を使った) 比喩以外の手段で理解できない
- b. 言い手 s が、ある (抽象的) 概念 T を (具体的概念 S を使った) 比喩以外の手段で表現できない

(19b) の理由は「ある概念 T が原理的に比喩以外の手段で表現できない」だとは限らない。「(言い手 s には) ある概念 T が偶発的な理由で比喩以外の手段で表現できなくなった」や「その手段が不必要になったから」であっても、理論的には何の問題もない — 少なくとも T に内在的に構造が備わっていない — という形而上学的バイアスを払拭すれば。

2.7.1 比喩使用の慣習化と習慣化

実際、比喩の慣習化 (**conventionalization**) は、言手 *s* が楽をして [[*T IS S*]] ばかりを使っていた結果、脳に“怠け癖”がついて、本来は [[*T IS S*]] の対立候補だった [[*T IS T**]] が忘れられたことだと解釈できる。

これは思考としての比喩は慣習化せず、あくまで比喩表現が慣習化することを意味する。ただし、比喩表現の慣習化の規模が大きく、体系的である場合には、あたかも思考が慣習化しているように見える(こともある)。

L&J が彼らの理論の論拠にあげる「ある種の比喩表現には代替不可能さ、少なくとも代替困難さが伴う」という事実に対しては、MEP 仮説によって、まったく別の説明を与えることができる。それは、私たち(あるいは私たちの文化についた)思考上の“怠け癖”，より正確には比喩(使用)依存症 (**metaphor (use) addiction**) の問題であり、極端な話、それは習慣化 (**habituation**) の問題として説明できる。

これはまた、専門家集団が一般人とは異なる比喩体系をもっている事実もうまく説明するだろう。専門家になることの一部は、思考を含めて、一般人にない行動を習慣化させることだからである。慣習化した比喩は、ただ単に、習慣化が大規模に起こっただけの話だということになる。

従って、ある場合に(例えば愛について語る際に)比喩に拠らないで語るのが困難なのは、(愛という概念の)比喩的理解が必然的だからではない。そのように(愛について)比喩を使って語る癖がついてしまって、その影響でそれ以外の形で思考できないという困難が生じているだけである。コトバと思考は、使われるコトバが比喩的であるか否かに関係なく、連動している。これは Vygotsky [16] によって示されたことでもある。

2.7.2 比喩性の摩滅の現象

[[*T IS S*]] 比喩は、そればかりが使われ続けていると、比喩性が消失する。つまり、比喩は“擦り切れる”。死喩 (**dead metaphor**) というのは、まさしく比喩性が消失した比喩の場合である。

ただし、使われ続けているだけで比喩性がなくなるわけではない。死喩になるには、おそらく超えなければならない“最後の線”がある。その最後の

線は唯一性の条件である。もう少し正確に言うと、ほかに表現候補がなくなるにつれて、比喩性は減少してゆき、最後の一つになると、完全に死喩になる。これは経験的に確かめられる予想である。

発話者にとっては“万能の言い方”が一つあればいいわけだから、発話者が怠け者である分だけ、比喩による表現可能性の縮小は促進される。その結果、数多くの表現可能性がたった一つの言い方に収斂してしまうこともあるし、これはある意味では、怠け者の原理からすれば避けられない結末である。

面白いことに、私の提唱する合理的比喩の理論と L&J の理論とでは、言語全体の比喩性の増減に関して、異なる予想をする。合理的比喩の理論は、ほかの条件が同じならば、言語全体として比喩性は減少することを予測する。それは怠け者原理の予測である。これに対し、L&J の理論では比喩は概念体系を豊かにするものであるから、減少するよりは増加するはずである。この意味で、L&J の理論では比喩が摩耗し、文字通りになってしまうことは説明できても、比喩の表現可能性が全体として減少するという効果を—もしこれが確認されたとしたら—説明できない。

2.7.3 反新語法 (anti-neologism) の原則

なぜ [[*T IS S*]] で *S* を用いた比喩ではなく *T* にふさわしい何らかの新しい語彙が作られないかという、それはそうするのが話し手にとっても聞き手にとっても効果的ではないからである。一方で新しい語彙を作ることは話者には大きな負担がかかり、他方で、それは理解可能性を下げる、つまり、新しい語彙を作らない方が、話し手、聞き手の双方にとって都合が良い。この意味でも、新語法を避け、比喩を使用するのは、合理性で一貫した話者/聴者の共益策になる。

3 おわりに

この論文で私は、MEP と MBU を区別し、比喩が存在する理由は発話の経済性にあるという論を展開した。

MEP/MBU の区別は、これまで指摘されてきた比喩に関する事実(見かけの必然性、思考への影響)に関して、興味深い説明、少なくとも再解釈を与える。見かけの必然性は、ヒト—特に話し手として

のヒト— が示す一種の中毒症状であると解釈できる。また、比喩的言語の慣習化が比喩的思考を形成するという関係は、Vygotsky 流の言語と思考の結びつきから予測できる。

私の分析が正しければ、Lakoff-Johnson 流の比喩理論は MBU に説明を与えるけれども、MEP には説明を与えない。私が提唱した経済性の観点から捉える説明は、(概念)比喩が理解の必要性に迫られて存在するという、CMT 流の比喩の説明のための前提を無用にする。これは説明仮説を弱めることであり、他の条件が同じであるならば、無条件に好ましいことである。

付録 A “歯車”の比喩からの証拠

§2.4.4 で、「比喩写像では“源泉領域の構造が先領域領域との整合性を保って保存される”というより、“先領域領域の構造が源泉領域の構造に翻訳される”と考える方がずっと理に適っている」と主張したのは、次のような例に基づいてである。

- (20) a. 社会の歯車に { なる; なって生きる } なんて、つまらない。
 b. 会社の歯車に { なる; なって生きる } なんて、つまらない。
- (21) a. 既成の職業に { 就く; 就いて生きる } なんて、つまらない。
 b. 中間管理職に { 就く; 就いて、それで一生を終える } なんて、つまらない。

“社会の歯車 (になる)” とか “会社の歯車 (になる)” とかいう比喩で用いられる場合、歯車は、(地域) 社会や会社を複雑で精密な機械と見なした時に、その部品に言及している。この例は、精密機械の部品という構造的役割が、社会や会社の役職という社会的役割に拡張されている例だと見なせる。

だが、(20) の例の歯車は単なる精密機械の部品である以上の性質をもっている。この場合、歯車は時計のような自律性をもつ精密機械の部品である。この場合、明らかに時計は自律的精密機械の代表例だと考えられている。

歯車が部品となって構成している全体が時計のような精密機械でなければならぬには理由がある。それは、ほかの歯車で動く機械の大半は、社会や大きな会社もつ複雑性、精密性、自動性、自律

性を有していないからである。特に自動性、自律性は本質的な要素である。

A.1 アフォーダンスの“知覚”の重要性

先領域となる状況の抽象的概念構造が、おそらくアフォーダンスの認識を通じて、何らかの仕方で認識可能だとすれば、これが認知意味論に意味することは決して軽微ではない。一つとして、L&J 流の概念比喩理論を真に受けると、このようなヒトの高度な事態認識/認知能力が体系的に見過される可能性が助長されることになる。これは明らかに、認知科学にとって危険な兆候である⁵⁾。

A.2 先領域の退けは「朝三暮四」

先領域の退け (Target Domain Override: TDO) は、これを「説明」しているように見える。だが実は、それは説明でも何でもなく、体系的に発生した過剰生成を適当なフィルターで濾過しているだけである。これは、GB 理論で Move α で適当に過剰生成した構造を適当なフィルター (格フィルター) にかけて濾過してのと、説明方法は同一である。この場合、TDO が事前に予測できない限り、実質的には何も説明されていない。GB の場合、まだフィルターに実質があったが、CMT の場合、それ以下である。それは「フィルタにかかってなくならないもの以外は保存される」としか言わない。そんなことはフィルターの定義から明らかではないか!!! これを知覚的「朝三暮四」と言わずして、何と言おう??

参考文献

- [1] R. Carston. Metaphor, ad hoc concepts and word meaning — more questions than answers. *UCL Working Papers in Linguistics*, 14:83–105, 2002.
- [2] N. Chomsky. *Aspects of the Theory of Syntax*. MIT Press, Cambridge, MA, 1965.
- [3] D. Gentner. Structure-mapping: A theoretical framework for analogy. *Cognitive Science*, 7:155–170, 1983.
- [4] R. W. Gibbs. Why many concepts are metaphorical. *Cognition*, 61:309–319, 1996.
- [5] K. J. Holyoak and P. Thagard. *Mental Leaps: Analogy in Creative Thought*. MIT Press, 1994. [邦訳: 『アナ

⁵⁾ 一般的な傾向として、認知意味論、認知言語学の研究は、ただか言語現象の詳細とも言えない記述から得られたに過ぎない高次認知レベルでの一般化を真に受け過ぎる。これ故、明らかに、低次認知レベルでの一般化と整合性が保証されていない。アフォーダンス理論との相性の悪さは、この一つの現われに過ぎない。

- ロジの力』(鈴木宏昭・河原哲雄 訳). 新曜社.]
- [6] G. Lakoff. *Women, Fire, and Dangerous Things*. University of Chicago Press, 1987. [邦訳: 『認知意味論』(池上 嘉彦・河上 誓作 訳). 紀伊国屋書店.]
- [7] G. Lakoff. The invariance hypothesis: Is the abstract reasoning based on image schemas? *Cognitive Linguistics*, 1(1):39–74, 1990. [邦訳: 不変性仮説: 抽象推論はイメージ・スキーマに基づくか? (杉本孝司 訳). In 坂原 茂 (編), 『認知言語学の発展』, 1–59. 東京: ひつじ書房.]
- [8] G. Lakoff and M. Johnson. *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press, 1980. [邦訳: 『レトリックと人生』(渡部昇一ほか 訳). 大修館.]
- [9] G. Lakoff and M. Johnson. *The Philosophy in the Flesh*. Basic Books, 1999.
- [10] G. L. Murphy. On metaphoric representation. *Cognition*, 60:173–204, 1996.
- [11] G. L. Murphy. Reasons to doubt the present evidence for metaphoric representation. *Cognition*, 62:99–108, 1997.
- [12] E. S. Reed. *Encountering the World: Towards an Ecological Psychology*. Oxford University Press, 1996. [邦訳: 『アフォーダンスの心理学』. 細田直哉 (訳). 新曜社.]
- [13] M. Shindo, M. Murata, and H. Isahara. A corpus-based study of semantic extensions of sensory adjectives: From synchronic and diachronic perspectives. In *Conceptual Structure, Discourse, and Language (CSDL-04)*. Edmonton, Canada, 2004.
- [14] M. Shindo, M. Murata, and H. Isahara. The role of metaphor in semantic extensions of sensory adjectives. 「京都大学心理学連合 COE 21 ワークショップ: メタファーへの認知的アプローチ」での口頭発表. [http://kyoumu.educ.kyoto-u.ac.jp/cogpsy/personal/Kusumi/MTWS/Shindo.pd%ef], 2004.
- [15] D. Sperber and D. Wilson. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell, 2nd edition, 1995.
- [16] L. S. Vygotsky. *Thought and Language*. Cambridge, MA: MIT Press, 1962. [邦訳: 『思考と言語』. 柴田義松 (訳). 新読書社.]
- [17] 中本 敬子, 黒田 航, 野澤 元, 金丸 敏幸, and 龍岡 昌弘. FOCAL/PDS 入門: フレーム指向概念分析/並列分散意味論の具体的紹介. [未発表論文: http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/introduction-to-focal.pd%ef], 2004.
- [18] 黒田 航. メタファーの研究は何のために?: メタファー研究が面白く, かつ重要である本当の理由について. [http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/why-metaphors-matter.pd%ef], 2004.
- [19] 黒田 航. “弱い” 比喩と “強い” 比喩の区別すると概念比喩理論の説明は破綻する: Lakoff & Johnson の狂信的な反客観主義への異論. [URL: http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/remarks-on-cmt.pdf], 2004.
- [20] 黒田 航 and 井佐原 均. 意味フレームを用いた知識構造の言語への効果的な結びつけ. 信学技報, 104 (416):65–70, 2004. [増補改訂版: http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/linking-1-to-k-v3.pdf].
- [21] 黒田 航 and 井佐原 均. 日本語の意味タグ体系を定義する試み: FrameNet の視点から. In 言語処理学会第 10 回年次大会発表論文集, pages 148–151. 言語処理学会, 2004. [増補改訂版: http://cls1.hi.h.kyoto-u.ac.jp/~kkuroda/papers/jfn-nlp10-rev4.pdf].
- [22] 黒田 航, 高梨 克也, 竹内 和弘, and 井佐原 均. 複層意味フレーム分析の紹介: 領域を問わないオントロジー構築のための効果的な前処理として. In 人工知能学会 19 回大会論文集, 2005.
- [23] 栗山 直子, 船越 孝太郎, 徳永 健伸, and 楠見 孝. 共同問題解決過程における比喩産出過程とその役割. In 第 21 回日本認知科学学会大会発表論文集, pages 212–213. 日本認知科学学会, 2004.